

# 米山梅吉記念館 館報

2005  
(平成17年)

秋

Vol. 6



第2回太平洋地域大会  
1928(昭和3)年

前列左から トム・サットン 米山梅吉

1928(昭和3)年7月、日本に朝鮮・満州を合わせた第70区が設けられ、米山は初代ガバナーに就任した。それまで日本の各クラブは直接国際ロータリーの監督下にあり、スペシャルコミッショナーが置かれていた。そしてその年の10月、第2回太平洋地域大会が東京で開催された。これは地区設定を要請した日本でのロータリーの発展を披露する場となった。

この大会は、当時のRI会長トム・サットン夫妻以下海外から100余名、日本からは首相をはじめ皇族も参加し、総勢568名という大規模なものになり、社会的にも大きな注目を浴びた。晩餐会、仮装舞踏会、お茶会、園遊会など華やかで温かいもてなしは参加者を大いに喜ばせた。



財団法人 米山梅吉記念館

## 館報第6号発行に際して

理事長 内藤成雄

米山記念館は春、秋の例祭を恒例としており、春は米山翁の忌祭、秋は館創立祭です。今年の秋は「遅ろう、米山梅吉の原点に」と題してシンポジウム開催を予定しています。日本のロータリーには米山を冠名にした2つの施設、車山米山記念奨学会と米山梅吉記念館があり、また、奨学会は全日本ロータリーが率いる巨大財団、目的は在日アジア地区からの留学生への育英事業、一方館は昨今の新館建設を機に漸く全国視点を認識された小財団、経費も運営も全く異なる組織ですが、一面子細に考えると心は共通項で結ばれていると思います。反日を国論統一のカードとするようなアジア国境間のギョクブの中で、在日留学生に国際平和を、ロータリーの精神を、言い換えれば米山精神を学び、会得して帰国、将来の指導者になって貰う教育的プログラムは奨学会にも必要だと思えます。その為には米山記念館はいささかでもお手伝い出来る施設だと思っています。こんな見地からシンポジウムには宮崎奨学会専務理事、谷内同奨学会監事(元三井信託銀行副社長)、当館取本前理事長の御出席をお願いしてあります。谷内氏は此の度「点検 米山梅吉、日本のロータリークラブと信託業の創始者」(新風舎文庫)を出版されました。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。

本年は全国ネットの当館理事、評議員の改選年であり、9月から新組織による活動が始まります。全国各クラブの皆さま、特に米山委員の方々は奨学会と共に記念館へも視点を向けて、何卒御来館等に任務を拡大、御協力の程お願いいたします。



## 就任ご挨拶

常務理事 井口賢明  
(河津北RC)

この度、財団法人米山梅吉記念館の理事に選任され、また理事会で伊藤文平氏のあとの常務理事を仰せつかることになった。

常務理事は、米山梅吉記念館の日常の事務を処理するものと理解している。ここ2年ほど前任の伊藤氏の仕事をみていて、私ごとがきかすという思いである。しかし、お引き受けした以上、記念館の意思の確実な実現と円滑な運営のため、非力ではあるけれども、努力したいと考えている。

自分の認識では、記念館として、ここしばらくの間、特別に大きな事業はないと思っている。ただ、情報化時代といわれる現在において、記念館、米山梅吉翁に関する情報を迅速、的確な方法で外部に伝えることは必要であろうし、それ以上にかんじて、記念館の目的を実現するかが重要であろう。

記念館の情報発信のことについていえば、記念館では、館報を年2回発行している。ロータリーの関係では、これを全国2340ほどの全クラブに送付している。問題は、それがどの程度見られ、読まれているかである。多くの人に目を通してもらわなければならない。例えば、クラブおよび米山関係の委員会の委員長にして、役員に回覧を頼むとか、

今、世の組織体は、多くがホームページを開設している。記念館では、まだこれを開設していない。やはりホームページを開設すべきであろう。しかし、何のためにこれを開設するのか、これにより何をしようとするのかというはつきりした目的を見定めることが必要となる。単に、他所もやっているからとか、ホームページを開設するだけが目的手段となってしまう。

このようなことを考えると、記念館の目的、仕事は何だろろうという記念館の存立の原則をしっかりと頭に入れておく必要がある。記念館の寄付行為での目的は、米山翁の記念とロータリー精神の普及である。米山翁とロータリーとの関係については、多くが知られてきている。しかし、まだまだ不十分な面があるかもしれない。これらの充実をもっとすすめることである。それと米山翁のロータリー以外のことについては、まだまだ分からないところが多い。例えば、実業界における活動、三井報恩会での貢献である。資料や情報の少ないなかで、困難なことであるが、手をつけなければならぬであろう。

面の痛いのには財政問題である。現在記念館を維持するために年間400万円ほどが必要である。これに対し、収入では、R1第2620地区、第2590地区、第2780地区から570万円の負担を願っている。米山記念奨学会から200万円の補助をうけている。それと賛助会費が600万円弱ある。これらが恒常的なものである。その他は、不定期なロータリアンやロータリークラブの寄付などである。賛助会は、恒常的なものといえるであろう。また、徐々に理解をえられつつある100円募金がある。したがって、賛助会員の拡充や100円募金の一部の実質をはかることも必要であろう。

要は、いかに記念館の存立の意義を知ってもらうかである。このことを充実させれば、おのずか財政の面でも道が開かれることであろうか。いずれにしても、理事長、理事、評議員、委員その他各位のご指示、ご指導を仰いで、職務をすすめていきたい。

# 春季例祭



例祭挨拶 内藤成雄 理事長

- 日時 2005年4月23日(土)
- 会場 関米山梅吉記念館ホール

- 例 祭
- 記念講演 演題 「米山梅吉のダラス行」  
講師 創立50周年記念誌委員長  
井口賢明 氏(沼津北RC)
- アトラクション ソプラノ独唱 田巻純江さん
- 懇 親 会



ソプラノ独唱  
田巻純江さん



講師  
井口賢明 氏



## ● 記念講演 ●

### ● 演 題 ● 米山梅吉のダラス行

一とく到大正7年元日のダラス行の「目的」をめぐって一  
付 記念誌の編集を担当して

● 講 師 ● 井 口 賢 明

#### 記念誌の編集を担当して

【はじめに】

ただいまご紹介をいただきました井口と申します。私はロータリーに38歳の時に入りましたので、30年くらい経ちます。

今頃、たまたま記念誌の運営委員になったところ、記念誌の編集を担当せよ、と仰せつかりびっくりしました。しかし、私がクラブに入った以降ずっと、記念誌の高代理理事松原謙一さんにお世話になりました。また、沼津北クラブは長崎クラブができるまで、記念館の事務局をつとめていました。そんな事を考え合わせるとこれも因縁かなと思っています。

そんなことで本当はもっと記念館のこと、米山さんのことを知らなければならなかったんですが、不知油で、まったくにも知らない、白紙の状態でした。私自身としては、もう少し内容のよいものができないかなという願望はありました。でも、それはそれとして自分の能力の中でやるしかない、と始めた次第です。

この本ができるまでに、理事長はじめ大勢の方からお話をいただきました。それから編集委員の方には大変ご苦勞をかけた。特にお名前をあげさせてもらえば、この本の印刷を担当した木内さん、本当に最後の最後まで、校正や版組のことでまだ間に合いうかなというぎりぎりの時間まで無理をいたしました。このように木内さんはじめみなさんのご努力で今日を迎えられたわけです。

本の出版は非常に嬉しいものですが、他いなどいうことがあるので、気を遣います。編集委員の方、この学芸員の市川さんにも校正をお願いしているわけですが、今の段階ではそれほど間違いは見つかっていませんが、これからどんどん出てくるのではと恐れています。自分なりに気は遣ったつもりですけれど、そのあたりは後になってみないとわかりません。

初めの頃、『ロータリー日本50年史』の小川節恵氏の本を見て、自分にはとてもこんなすごい文章は書けな

いな、と手がつかなくなりました。それから、原稿段階だと自分で読んでいて、うんうんと納得はするのですが、いざ印刷にはいって校正段階になりますと、自分の文章がとくに怪しくなります。自分自身の本ならこれでもう申したいと思うくらいだったのですが、そうもいきません。そういう落ち込みを今日までもみまわっています。

#### 【編集の方針 1】

それは別として、今回の本の編集方針を私なりに考えました。勿論、編集委員会の了解を得た上ですが、1つは、できるだけ原資料にあたっていただきたいということです。

日本のロータリーでは、第1回の地区大会が昭和4年4月に京都で開催されました。そのときに卓話十戒というのが話題になったといえます。これは根本先生の『歴史背景』にもひかれています。そこには、「くどくどしんかも熱意を述べぬこと」、「開扉直前に白熱しなかつてもいい」とか「部員を落とさぬこと」とか「書いちゃいます。私は、この十戒というのはなかなかおもしろい、そのとおりだと思ひ、記念誌の中にもひいてみたい」と考えました。この卓話十戒の一番元になっているのが成木太一殿という方の『われらのつどい』という本だろうと思います。その本の中に、第1回地区大会、このとき米山さんがガバナーな人ですが、その2日目の懇親会のときにこのことが話題になったと書いてあります。私は、そのことが京都地区大会の記念誌に載っているのだらうと思つてました。ですが、そのことは書いてありませんでした。そして、私は、索引きとなるのも嫌だと思ひ、載せませんでした。

それから、自衛隊になるので気が引けるのですが、昭和10年内に入り、横濱のロータリーは非常に輝きを放ちました。このとき、東京クラブの松井亮さんという方が、この方は貴族院議員だったのですが、貴族院でロータリーについてどう思うか政府の見解を私訴するということがあったそうです。これは『ロータリー日本50年史』にも出ています。これは当然載れたいなと思ひ、早い段階で文章の中に取り入れていました。出版までには、松井亮という方が貴族院で話した内容を議事録で確認しなければいけないと思つていました。それでこの書だけではなかったのですが、国会図書館に行つて議事録を調べたけれどもちつとも出てこない。議事録が見つからないので、確認しないで載せようかと思ひました。校正段階で知らないうちに、今度はこれだけの用件で国会図書館に行つて調べてみました。私の見たロータリー日本50年史の年表はその時期が4月、実際は3月だったのです。この年表の月が違つていたので見つからなかった。松井氏が貴族院でロータリーについて質問し

たというのは『同窓ロータリー月報』(昭和14.04)に、ある程度詳しい解説や記事があります。それで年月日をばっさりさせて探したら、ありました。記念誌の年表にもありますが、昭和13年2月14日に1回、その翌年昭和14年3月15日と23日に東京R.C.の予算委員会が質問をしています。聯合3回やっているとこのことです。これで私も安心してその文章をパスさせました。年表にもいれることができました。

このように、私としてはできるだけ元の資料を確認したいという考え方でやってきました。ただ実際それがどの程度成功しているかという点、100%とはいえない面があります。どうしても原資料を確認するのが困難な場合もあるわけです。ただ、他の方の書いたものを見ていて、直感的に、この方の資料はひいては大丈夫だなとかますますいなくなるものだらけだと思います。例えば、日本にロータリーができたのが1920年、大正9年。このいきさつについて原資料がはっきりしないという問題があると思います。東京クラブの道原植三さんがロータリーの友に「東京R.C.創立について」という文章を書いています。この方の文章は正確だなどという気がしていました。安心してひかせていただきました。

いずれにしても、自分で元の資料にあたることのできればよいのですが、なかなか当れない場合があるわけです。

**【編集の方針 2】**  
それから自分でも無謀かなという気はしましたが、米山善吉さん、この記念誌に関連する資料を調査していきなさいという方針をたてました。

この点でロータリー関係の資料については多少お役にたつかなという感じがしなくてもありません。ロータリーの友は、昭和8年に創刊され現在90年くらい経っています。はじめ私は、その資料についてロータリー文庫で出している資料目録、この中に米山さんに關する資料をまとめてあるわけですが、これで処理をしようと思いましたが、ある編集委員の方から「いやまだいっばいあるんじゃないの」といわれ、それではというところで、編集委員のみなさんにお願いをし、ロータリーの友創刊以来50年分全部読んでもらいました。

これは、自覚してよいのではないかと思います。編集委員みなさんのお手紙であります。必ずしも米山さんあるいは記念誌だけのことではなく、ある意味私の趣味みたいなところもありました。戦前のロータリーのことについても取り上げました。

ロータリーの友はこのように後巻ができますが、その他の資料を集めるのは大変です。本郷は各地区、クラブの記念誌を撮らなければいけないのでしようが、それは時間的に不可能と思い、ロータリー文庫の目録

を使わせていただき、他の文庫・資料など目につくものを補充しました。

その中で、あまり知られていない本や資料がありまして、『米山善吉評伝』もそのひとつです。他の本にもあまり引用されていないと思います。『米山善吉伝』を著した佐々木博さんはこの『米山善吉評伝』というのを見ては、おもしろいかな、という感じがします。今までの米山さんの特にお少のころの部分が多量に取られているので、すから、検証しないでそのままだと取り入れるのはどうかと思ひ、資料編に掲げるだけにしておきました。私が見た資料では、この本を引用したものはないかなという感じがします。

もうひとつ同窓会図書館で見つけたのですが、米山さん連『ロータリー・クラブ』という20ページくらいの薄いパンフレットです。これも今まで見たことがなかった。昭和4年2月23日のロータリー記念日にラジオ放送したものをまとめたものです。

現在はインターネットにより資料の検索が非常に楽になりました。同窓会図書館だけでなく他の図書館のものでも、米山善吉の著書と引けばポンと挙がってきます。ですからあまり苦労しているわけではないのです。

米山さんの主要な著作はこの記念誌にございます。ほとんどが初版本ですが、1冊『米山善吉文化と海洋兵学校』、これだけが初版本ではありません。

米山さんの著作の中で、私がつかっていただけていたものがひとつあります。何人かが書いたものをまとめたもので、その資料が青森県立図書館にあるというわけですが、現物を確認しなかつたので、資料編に載せませんでした。

このように、方針としては米山善吉さん、米山善吉記念館についての資料を調査してみようと思いましたが、それがどの程度成功しているかどうか、今後皆様方に検証していただくことになろうと思います。そんなことも含め今回の記念誌では、後に調べる方が後押ししやすいようにと思ひ、できるだけ往後で出所を示しておきました。



書桌上的の善吉

## 米山善吉氏のダラス行

### 【2回目のダラス行】

米山さんは、ダラスに2回行っていきます。1回目は、日本を大正6年10月15日に出、帰ってきたのが翌年の2月9日の朝です。もう1回、2回目は、昭和4年の5月末から6月にかけてです。ただ、もう1回可能性があったと考えられます。というのは、米山さんが20歳でアメリカに行くと8年間このようにおられた。そのとき、8年もいたのだから南西部の方に旅行した可能性はあるのではと考えられますが、その匂いはかきつけられません。そのときは多分行ってはいないかというようになります。

2回という前提でお話をさせていただきますが、日本のロータリーに、昭和3年の7月から地区が設けられ米山さんが初代のガバナーになります。そして翌年の5月にガバナーとしてダラスの国際大会に行つた。これが2回目の昭和4年の5月28日から6月5日までダラス滞在中になります。

このときの資料は、事務『東大東』という本などが結構あります。このときは、ご子息の植三さんが慶応大学を出られて助手になり、イギリスの大学に留学されるということ、植三さんも伴って行った。

それから、米山さんは、ダラスの国際大会に出て、その帰りに各クラブに手紙を出しています。当時クラブが身つたころうと思ひます。各クラブに出した手紙の内容が一字一句同じかどうかはわかりませんが、その手紙が大抵クラブの会報に載っています。

大阪クラブには、4通出しています。大阪クラブの会報から引用したものを記念誌の資料編に載せておきました。これは読んでみると面白いし、資料的にもなかなかです。もうひとつ、この性質上、今回は載せられませんが、ダラスの国際大会に大阪クラブの生駒吉之助さんという方が行っています。生駒時計岩の方だろうと思ひますが、非常に前後で、それこそ、当時の状況、この方の人物を彷彿とさせるものです。いつかの機会に紹介できるといいなと思ひます。

### 【1回目のダラス行】

昭和4年のときの資料はこのようにいくつかあるのですが、1回目のダラス行きの資料がなかなかないのです。大正6年10月15日に日本をでていたのですが、その行儀の中で、ニューヨークからダラスに行つた。大正7年の元日に、三井物産の福島善三さんの家をおたずねしています。

私は、米山さんがこのときなぜダラスに行ったのか、本当はここに興味があるのかもしれないと思ひます。しかし、ロータリーの関係では、行った目的よりも結果の

意味のほうに語り継がれています。私自身記念誌の編集を担当するまで、このことをしからなかったのです。皆さんご承知でしょうが、おさらいの意味で、昭和の話をさせていただきます。



米山さん、大正7年の元日の朝、ダラスの福島善三さんの家をおたずねしています。昭和4年の5月28日から6月5日までダラス滞在中になります。

私にすれば、願望的文章だと思ひます。背後のいるというなきつきがなくて、理由を話さずと長くなります。私が、私自身は、米山さんと福島さんの間でロータリーの語が出たあるいは例に出たということについて、疑問を抱いています。もう少し検証する必要があります。

ロータリーの語が出た。ロータリーの例に出たというのには、あながち根拠がないわけでもない。というのは、福島さんのご夫人がロータリーの友にダラス時代に米山さんがおたずねしたことを話している。「例にダラスとして無招待したことを話しています」というようなことをいっています。ですから多くのことは、それをひいて米山さんと福島さんがロータリーのことを話した、あるいは例に出た、というわけですね。

昭和9年に発行された『ロータリー-さまさま』という種子があります。書かれたのは、東京クラブのメンバーで新聞記者だった伊藤正徳という人です。この種子では、大正9年に米山さんがダラスに行ったと書いてありますが、今では大正7年と誤認されているので、これは別として、この中にダラスを訪問したときに福島さんと米山さんがダラスロータリークラブの話をした、そして米山さんが共鳴して帰ってきてロータリーの設立に赴いた、という文章があります。

私がみた限り、これが一番最初のもので、米山さんは、この本の序文を書いています。だから、米山さんの認知をうけていられるともいえるわけですが、そんなことで、これがすつと尾を引いている感じがなきにしも

あらずです。  
先ほど話しました塩原三三さんの「東京京C創立について」の文章の中では、その辺を成めた内容になっていて、私としては、塩原さんの考えに与しなさいと考えております。

【1回目のダラス行がロータリーにもたらした意味】  
いざいざにしても、その時にロータリーの歴史が出たかどうかは別問題として、福島さんが翌大正8年の暮れに日本に帰って来て、その時にダラスロータリークラブのメンバーから東京にロータリークラブを作ったらどうかと勧められた。福島さんもやってみるかという気だったでしょう。それで、ロータリーの本部から東京にロータリーを作る権限を与えられた。

けれど、福島さんは、米山さんと会った当時35歳。帰って来たとき38歳になっているかいないかです。福島さんは、帰って来て三井物産副支配人という立場で、いわゆるサラリーマンです。また、それまでほとんどが海外生活だった。果たしてロータリーのメンバーを集められるかという考えがあったでしょう。それで、その権限をダラスで会った米山さんに託すわけですね。

米山さんは、半半位の間に、これ以上のメンバーはないだろうという人物を集め、東京クラブを創立する。米山さんの高邁な思想、理想、そういうものが東京クラブに表れている。それがずっと大阪、神戸につながっていき、そして現在の我々のロータリーにもつながっている。

そういう意味で、大正7年元日に米山さんと福島さんがダラスで会った。福島三三氏(大正8年)というのには日本のロータリーの原点ではないかという方があるわけで、私もそのとおりであらうと思っております。

#### 【1回目のダラス行の目的】

それはそれでいいのですが、米山さんが一体なぜそのときダラスに行ったかという話になるわけですね。米山さんは、公務でアメリカに行っている。政府が派遣したミッションの委員であるわけですね。このことは、今回話を聞いて頂いた部分で、公文書箱へ行って任命書や復命書なども見ました。

私は、政府の派遣したミッションがダラスに行っていて、



1917(大正6)年12月7日経育生進進出協会の

#### 日買田使節一行歓迎大宴会

なまたま三井銀行と三井物産ですから、同じ系列の会社の責任者の席へ着てみようかなというところで福島さんと会った位に思っています。ところが、このミッシェン、日買田委員長、「男爵日買田様太郎」による。そのミッションは、ダラスまで行っていないので、

それで、私とすれば、公務の日程がまわって、そのなかでなぜわざわざ一人ダラスまでという感じになります。私は、アメリカ東部へ行かないで、よく分かりますが、地味で見るとダラスまで直線距離で約2000kmあります。当時鉄道が発達したアメリカであっても、おそらく一昼夜かかっているでしょう。そうすると、むこうに1日いたとすると3日はとらなければならぬ。そんなにしてまで、なぜダラスに行きたのか、決して、趣旨の目的ではなかった筈です。

この疑問がまだ私にはわからないのですが、多分この疑問を解く直接的な資料はない。だから状況証拠から回めていくしかないだろうと思います。それでその状況証拠ですが、これを踏さうと思つたらもう時間がなくなってきました。

三井物産と三井銀行、これは三井合名という持ち株会社、その下にある直轄の事業会社なわけですね。ある意味、三井系統に三井物産にすれば三井銀行というのは金庫番みたいなところですね。

金庫番に親類を挙げてご招待しなければいけないのが、三井銀行が三井物産に寄付をしていく資金量です。その程度であったかということですね。おそらく三井銀行の資金のうち1割から2割くらいの間かなという感じがします。三井物産は、その他にもっと取引が多い銀行もあるわけですね。例えば外国高利貸などでいけば、当時横浜正金銀行が三井物産の高利貸を引受けていた。その金額は大きいとすけれど、それについても7割近くを三井銀行が保証していた(価値1300

万円のうち700万円を三井銀行が保証)。

三井物産が綿花の取引について、ダラスで現地法人を作って取引をしていて、現地法人が現地の銀行からも借り入れをしていた。それについてもすべて三井銀行の保証が要求されていた。

取引の間両士との関係でもありますが、それ以上に三井物産になにかあつた。三井銀行が一律にすべてを引き受けるという情緒的な関係でもあつたということがいえます。もの本を眺めますと、三井銀行と三井物産は、一連托生の関係であるという表現を使っています。三井物産になにかあれば、他の銀行は手を出さないわけで、みんな三井銀行が引き受けるという関係であつた。

もうひとつは、三井物産の綿花取引の状況です。始めのうちは、インドでの綿花取引が主体だったので、アメリカの綿花にシフトされていきます。アメリカの綿花取引は、ご承知のとおりダラスが中心です。なぜアメリカ綿花かというと、色々理由があります。ひとつはアメリカ綿花の品質がよい、もうひとつはインドが当時本國のほうりで高品質を産出した。綿花の取引は、非常にお金がかかるので、同盟取引ではなく、現地に現金を持って行って買付ける。つまり現金が要する。ですから高替を認められると現地に持っていくお金がなくなってしまう、という意味でアメリカにシフトしたということでしょう。

当時の日本の綿花取引は、20%から30%位を三井物産がやっていたという状況もあります。また、三井物産の輸入商品の40%から50%が綿花だったということですね。

それから、当時の国際情勢、第一次世界大戦が大正3年7月に始まり、日本もその8月にドイツに対して宣戦布告をしてドイツが持っている権益の背負を占領した。しかし、戦場はヨーロッパである。日本は苦戦は悪いですが、大東亜地帯的な意味で進出した。そして、綿花が当時国際商品になっていて、三井物産は、綿花を単に日本に持ってくるだけでなく、アメリカで買った原料をヨーロッパで売るといった動きをやっていた。それをダラスの現地法人がやっていた。そんなこんなで、三井物産の中で、綿花の取引額が非常に高くなっていった。

何年かが過ぎ、それまでアメリカは、モンロー主義で参戦しなかつたのですが、大正6年には大戦参戦の日鼻はついてきて、ドイツの敗色が非常に濃厚になつてようやく参戦をする。皆さんも記憶にあるかと思いますが、レマルクの「西前敵無常なし」という本。ドイツが敗色濃厚となる丁度このころの兵士の間の歌。戦気分を消した内容の本ですが、そういう状況になつた。

そうすると、戦争が終わるといふことで、国際商品といわれている綿花の値段の暴落が見えてきた。大正7年頃です。ダラスで綿花が10日で30%低下がした。そうすると、三井物産のアメリカでの綿花取引の中心はダラスですが、一連托生の関係にある三井銀行の経営をあずかる常務の米山さんとして、気が付くやいなや三井物産では、そのころ三大損失というのがある。ダラスの綿花は3000万円というのがある。当時の日本の貿易、3000万円というのは非常に大きい。当時の日本の貿易輸入額が15億(大7)くらいです。おそろく、三井銀行の輸入が50兆円くらいです。おそろく、三井銀行の全貸し出し金の1割を超えようという額ではないかと思つた。

それで米山さんは、政府派遣ミッションの公費の動向を日中、正月の3日間の休み(日本風)を利用して、ダラスに行つてこよう。現地の綿花商売の状況はどうか、在米のどのくらいあるか、暴落への対応はどうか、直轄の責任者の話を聞きたいということだったのではないかと、どうのかが私のお考えです。これについて直接的な資料がなかなかないわけですが、こういうことではないかというのが私の結論です。

終わりになりますが、今回記念誌を作っていて、危うく裏を透したことがあります。私の無智をさらさしうになつたことですね。それはこの日誌の裏に米山さんが作つた米山家の由来を書いた本があります。表面の文章は、印刷物がありわかりなのですが、裏がどうなっているのを見ることがあります。昭和18年に書いたもので読みにくいのですが、私は、雲城(えいぎ)ということば、雲城とかお城という意味のことばを知らなかつた。それで雲(えい)という字が読めなくて、雲を雲だと誤り、雲城(とういぎ)と誤った。その後、青山学院に資料を見に行つたときに、青山学院の初等部の責任者の書いた手書きの原稿があつた。そこはこの本の裏面の文章を書いたものがあり、このころが雲城とあつた。あつたのなかで叫んだわけですね。危うく間違えるところ、どうにか勘弁かしらうと示ささないでください。

これは、気がついて訂正できまされたが、この本のなかにも、気がつかない、とんでもない間違いがあるかも知れません。いくばくも一生懸命やるといっても、結果が間違つていければどうしようもないわけですね。記念館に連絡がつかなければよいと思います。

本題の内容が詳しくできず、中途半端になりましたが、ご静聴いただきありがとうございます。

# 超我の人 米山梅吉の足音

全国から記念誌読後の感想が  
寄せられました。



## 温故知新

理事 乾 昇

今春、米山梅吉記念館の35周年を記念して、「超我の人 米山梅吉の足音」が発行されました。

第1編「米山梅吉 その生い立ちと人となり(19頁)」、第2編「米山梅吉 そのロータリーとの関わり(54頁)」、第3編「米山梅吉の足音」も止められず、第3編「財団法人米山梅吉記念館の歴史(17頁)」を続けて読んでいました。

今まで、兵の道徳など断片的に読み、かなり知っているつもりだったのが腑みかしくなりました。そして「日本のロータリー」の真の起源を知り、米山氏が如何にロータリーに没頭していたかを知ることができた。当時のロータリーが現在のロータリーと異なるのは出典と書えようが、書き言葉を敬しるを知るべき歴史の書と書え。

最後の資料編を含め井口賢朝編集委員長の筆頭に高しうたいご苦労の方々に心から敬意を表したい。

## 横田 光二

評議員

『超我の人 米山梅吉の足音』の、充実した内容には米山梅吉先生のお人柄と実績を求むるころなく感服にさせられたものであります。

その中でも、後半「資料編」の「挨拶・講演」もまた貴重な資料の集積であります。たとえは本館クラブ例会における「友愛の無い尊厳は冷たい」また「ロータリーにはServiceとFriendshipの二つ以外に両方もない」というのも同様に貴重なものだと述べられた記録など、いずれも深く私の心に響きました。

## 渡島 清夫

評議員

『超我の人 米山梅吉の足音』を読み終って、日本ロータリーの父としての20年期、日本ロータリーの基礎を作った一貫しての奉仕の足跡は、今日本ロータリーの発展の源動力であり、この創立35周年記念誌は日本全国のロータリークラブで備えて、多くのロータリアンの教育参考資料として用いられるべきであると考えます。米山梅吉が特に次の時代を予言する少年奉仕に情熱を注ぎ、私財を投じて実行した記録は多く残されています。この誌を受けついでいきたいと思います。

## 掛水 俊彦

理事

二度目のガバナ―として公式訪問中、熱誠の紳情がないのが残念。須の生涯をこれほど克明に通った記録はないのでは、日本ロータリーの創始者と呼ばれるのがよく分かる。

ロータリアンなら、翁の名前は誰しも知るところだが、経歴、人柄は殆ど知られていない。会員10万人を超え、FJで重要な地位を占める日本のロータリー、改めて翁の素直性、偉大さを認識する。出版に当たっての関係者のご苦労に心から敬意を表したい。

● 記念誌のお申し込みは (株)米山梅吉記念館へ



# 「点描 米山梅吉」の出版を終えて すべては“三人の侍”の話からはじまった

谷内 宏文 (川口RC)

平成7年2月に、東京日本橋ロータリークラブに入会した際、新入会員は自己紹介を兼ねて“イニシエーション・スビーチ”なるものをする事になった。30分間の間に、二人が話すのが恒例だということです。そこで、何を話そうかと考えた。

これはこの際、米山梅吉翁の創った三井信託銀行に勤かかせてもらった後輩として、翁の事を話さない手はないと思いましたが、三井信託では、翁の没後50年の節目を企画中で、そのために、あらためて翁に関する資料を数かおこなっていたことも、私がそう思った原因のひとつでした。

ところで、話す相手は、ある程度翁のことを知っている人たちです。15分という限られた時間で、翁のことをより知ってもらうにはどう話せばよいか、ここはひと工夫が必要でした。

翁には沢山の顔があります。先ず、維新動乱の最中に生まれた武士の遺児・苦学留學生・ジャーナリスト志望者・文筆家・歌人・銀行家・信託業の創業者・財界のオーブリアン・さらにはロータリークラブ・青山学院・三井報恩会等々の公益活動の先駆者等々。そんなことを思って、最初は、昔見た映画の片断

千草歳満する多福尻仲内に擬して“七つの顔の男”にしようかなあ、などと思ったりしました(段々が考えることが多いといつ笑ってしまいました)。到ちもろん、七つの顔では15分の話には足りません。成程です。そこで、次に考えたのが、この「点描

米山梅吉」の最初の巻にした「三人の侍」というものではないかと考えた。

話を、実父和田竹道と油田成徳そしてポール・ハリスにしぼって、世に出るまで、世に出るから、そのうえでの華仕活動の三つの流れにまとめてみてはと想ったのです。

この話は、その後、川口クラブに移ってからは、30分卓話にふくらみ、いくつものクラブでの卓話の機会を得ることになり、当記念館の3年前の9月16日

の創立記念日でも話させていただきました。そして、この「点描」全体が、この「三人の侍」の情を大きくふくらませたもので出来たものでした。ですから、あの日本橋クラブのイニシエーション・スビーチの機会がなければ、この本も、こういう形では生まれてこなかったでしょう。

この本を書くにあたっては、翁の伝記の決定版である佐々木邦の「創業と奉仕の一生」が書き切れない部分、特に翁の三井の時代、財政金融家としての事業を精究することに意を注ぎました。翁が多面的だっただけに、翁が歩んだ各時代それぞれに沢山の人の関わりを持っていて、それらの人々の関わりを知ること、その時代時代を知ることで、翁の生き方を知ることが出来るのではと、そのことを述べたいながら調べるを続けました。



## 推薦のごとは

谷内宏文著「点描・米山梅吉 日本ロータリークラブと信託業の創始者」(新風舎文庫)を推薦します。同著は三井信託銀行に勤めた著者が、日本に初めて新った信託業の米山の業績を専門の立場から詳述。更に三井報恩会、青山学院等の社会奉仕、慈善への奉仕に密着した米山の歩道詳しく伝えて頂ければ米山の業績の全貌が把握できると思っています。

米山記念館理事長 内藤 成雄

## 『米山梅吉デー』について

長泉小学校長

戸枝 浩

この本が面白いから人々としては、主には、ロータリー・銀行と信託の仕事に關わる人・いわゆる三井グループの人そして青山学院の關連の方たちを想定しました。そのため、すこし狭まった沢山のテーマを感することになりましたが、それは、米山翁の事績がそれだけ多くの分野にわたっていた結果であることは言うまでもありません。

また、もともとがいくつかの語の積み上げの形をとりましたので、それぞれは独立した語として、読み切り出来る構成になりました。先ずは、ご関心の

あるものからお読みいただければと思います。明治元年に生まれ、敗戦の翌年の昭和21年に亡くなられた米山翁の生涯を学ぶことは、72歳まで私を生かしてくれた、「日本」と言う國の一番身近な歴史を学ぶ族でした。

「点讀 米山梅吉 日本のロータリークラブと信託業の創始者」 谷内寛文 著  
新風舎文庫 定価 800円 (税込)  
TEL:03-3746-4548 FAX:03-5414-3484

## 創立35周年誌「超我の音」 正誤表

下記に誤りがありました。ご訂正をお願いいたします。

ページ	段落	行	誤	正
1	写真説明部分		昭和10年2月	削除
21	左	8	長崎島	佐賀島
35	左	20	昭和元年	大正15年
37	右	24	cont. over	don't over
44	横外 (注3)		昭10.01	昭34.02
53	右	4	Penetrations	Penetrations
147	誤示案3	7	INTERPRETAION	INTERPRETATION
152	右		伊藤正徳	伊藤正徳
165	右	下から13	其の外に	其の外に
170	右	36,38,43	解譯	解釋
170	右	46	興	興
171	左	40	起解	起解
173	左	23,28	勤め	勤め
174	左	14	其のクラブ	其のクラブ
179	左	30	善に興し	善に興し
183	左		誠恐	誠恐
186	左	11	誠恐	誠恐
188	右	19	若干の	若干の
188	右	20	語を缺たざる	語を缺たざる
189	右	10	修詞を為し	修詞を為し
190	右		若し之を	若し之を
192	右	8	日常生活	日常生活
192	右	下から14	軍備縮小会議	軍備縮小会議
196	右	28	北處	北處
212	右	下から14	Governer	Governor
214	左	18	employer	employee
217	右	6	武治五人	武治五人
218	左	本文 35	披露	披露
219	左	22	Benamat	Benamat
254	年表	年台16の欄	東京都	東京市
261	年表	年台70の欄	2月6日 [内地出生]	3月6日

町内の小中学校の児童生徒が、郷土の偉人である米山梅吉翁を顕彰する『米山梅吉デー』の取り組みは平成7年に始まったと聞いています。今年度の長泉小学校の子どもたちはそれぞれ、今年で次の箇所で汗を流しました。



- 1 年生—長小の中庭周辺の清掃
- 2 年生—長小のグラウンド周辺の草取り
- 3 年生—米山梅吉記念前駐車場の清掃と米山梅吉翁のお墓参り
- 4 年生—稲荷神社の清掃
- 5 年生—中土府グラウンドの草取り
- 6 年生—泉公園と地下道の清掃



こうした活動の主旨は、米山梅吉翁の遺徳をしのぶとともに、次代を担う子どもたちにはボランティアの心を培うことにあります。

私が約30年前、長泉小学校に在職しておりました頃には、中庭の池の西側に図書館があり、大廳下とその図書館を結ぶ渡り廊下の横に『米

山文庫』があったことを覚えております。しかし、その当時はその『米山文庫』が十分に活用されていたとは言えず、また子どもたちに米山梅吉翁の業績を伝える機会もありませんでした。

私が米山梅吉翁の偉大さを知ったのは長泉小学校を去ってからでした。明治から大正にかけての沿革において大変に功績のあった江原新六氏を研究する機会があり、調査をする過程で米山梅吉翁の業績とその偉大さを併せて再確認したのです。そして、長泉小学校在職中に米山梅吉翁のことをもっと調べ、子どもたちに教えておけばよかったですと後悔したものでした。



昭和6年 米山が寄贈した米山文庫

昨年4月に再び長泉小学校に赴任し、当時の米山文庫はなくなっていました。年間計画に『米山梅吉デー』が位置づけられ、校内には米山梅吉翁や米山文庫のことを知らせる掲示物が常設されており、またそのことを大変うれしく思いました。

こうした米山梅吉翁を通して取組みが、子どもたちが地域に根ざした大人として育つきっかけにもなると考えると、大変にすばらしいことだと思いました。

これからも長泉町の誇る米山梅吉翁についての学習とその精神を受け継いだ実践を継続していくことが私たちの使命だと考えております。

## 平成17年度 定例理事・評議員会報告

平成17年8月28日、恒例の定例理事、評議員会が記念館において開催された。台風11号の影響も届付近は大したことなく、全国から遠路をわざわざ御出席の役員さんが成程の中熱心に御出席を下さった。大よそは執行部所属通りに可決され、有難いことであった。

本年は役員改選の年であり、理事・評議員が選出決定された。

### 理事・監事・顧問

地区	委員長	理事	監事	顧問	地区	委員長	理事	監事	顧問
2500	内藤 英	井口 賢明	三浦 浩	山本 隆	2500	藤田 英	山本 隆	山本 隆	山本 隆
2510	北村 隆	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2510	北村 隆	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2520	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2520	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2530	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2530	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2540	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2540	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2550	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2550	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2560	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2560	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2570	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2570	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2580	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2580	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2590	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2590	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆
2590.1	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆	2590.1	三浦 浩	三浦 浩	三浦 浩	山本 隆

### 評議員

地区	委員長	評議員	地区	委員長	評議員
2500	藤田 英	山本 隆	2500	藤田 英	山本 隆
2510	北村 隆	三浦 浩	2510	北村 隆	三浦 浩
2520	三浦 浩	三浦 浩	2520	三浦 浩	三浦 浩
2530	三浦 浩	三浦 浩	2530	三浦 浩	三浦 浩
2540	三浦 浩	三浦 浩	2540	三浦 浩	三浦 浩
2550	三浦 浩	三浦 浩	2550	三浦 浩	三浦 浩
2560	三浦 浩	三浦 浩	2560	三浦 浩	三浦 浩
2570	三浦 浩	三浦 浩	2570	三浦 浩	三浦 浩
2580	三浦 浩	三浦 浩	2580	三浦 浩	三浦 浩
2590	三浦 浩	三浦 浩	2590	三浦 浩	三浦 浩
2590.1	三浦 浩	三浦 浩	2590.1	三浦 浩	三浦 浩

理事のうち理事長内藤成雄は再任されたが、常務理事伊藤文平が退任、非常務理事に井口賢明(昭津北)が新任された。氏はこの退任された「感徳の人、米山梅吉の覚悟」の執筆者、幸甚士現職ながら心よく新常務の重責を担うべく務めている。

収支会計については約1,600万円差の差額が提出され、通過した。常務は当20地区、神奈川2地区、米山梅吉会外の助成によるものだが、賛助会費、全国100円募金等の不特定多数を当り予算に基きなければならぬ不安定性が指摘されたが、さしての差額は約68名、約68名、クラブ数は約20であった。

提出された事業計画の夫よそは

1. 春、秋の定例会の実施
2. 米山梅吉の生誕地(案内、宿泊観光案内、移動) 同会の誘致、通関、案内マップの設置など)

3. 選挙、事業費の確保(簿記運動の継続)
4. 情報、発信(ロータリーの式、ガバナ―月報、記念館、研究会等)
5. 展示、出版(門(記念館)出版、特に「超我の人の山梅吉の覚悟」の版元決定)

であったが議決一致で決定した。熱心な一般協賛が行われた。主なものを1つを挙げる。近年アジアの国際間の親愛、交流がぎくしくしている。アジア地域からの留学生諸君、特に中国からの留学生に対しては財政援助に見合うロータリー、米山梅吉への研究が必要であり、そのためには記念館がその役割を果たすべきだとの声が数人から聞かれた。具体的には米山梅吉会が果たすべきことで互々それぞれの役割はあると思うが、今後同任協賛は専断に意見を交換し協力すべきだということ意見に賛同された。

以上理事、評議員会のあらましを申し上げた。

—100円の細い糸が館と全国を結ぶ—

## 全国1人年間100円募金運動 全国ロータリーアーンに向けて

米山梅吉記念館

引続き展開中の運動です。既にご送金いただいた個人、クラブ、地区も相当ありますが、この運動は当分の間、事業費の不足をおぎなうために毎年度継続して行っております。クラブ単位、地区単位でご送金いただく方が便利ですが、勿論個人でも結構です。この運動も任意のご意志によってお願いしております。何卒よろしくお願いたします。

お申し込み、振込先  
(100円募金)事業資金振込先  
郵便振替口座 番号 00820-4-57730  
財団法人 米山梅吉記念館

### 全国100円募金地区別表

平成16年7月～平成17年6月

地区No.	区集	地区	口数	地区%	区集	地区	口数
2500	68	北海道東部	4	2670	73	愛徳・香川・徳島・高知	13
2510	72	北海道西部	9	2680	74	兵庫	18
2520	90	岩手・宮城	5	2690	67	岡山・鳥取・島根	18
2530	63	福島	10	2700	59	福岡・佐賀・長崎	9
2540	43	秋田	9	2710	74	広島・山口	19
2550	50	栃木	6	2720	75	熊本・大分	8
2560	56	新潟	3	2730	64	鹿児島・宮城	4
2570	56	埼玉西北	12	2740	58	長崎・佐賀	7
2580	72	東京・神奈川	12	2750	90	新潟・山梨・群馬・栃木・群馬	4
2590	63	神奈川	13	2760	80	愛知	13
2600	58	長野	11	2770	84	埼玉南東	12
2610	65	富山・石川	6	2780	69	神奈川	15
2620	84	静岡・山梨	31	2790	85	千葉	27
2630	80	岐阜・三重	10	2800	57	山形	6
2640	76	大坂府南部・和歌山	16	2820	49	茨城	5
2650	94	福井・滋賀・京都・奈良	10	2830	43	青森	9
2660	86	大坂府北部	11	2840	47	群馬	4
<b>合 計</b>						<b>369口</b>	<b>2,506,427円</b>

### 賛助会費ご協力をお願い

理事長 内藤 成雄

館運営及び事業費の一部にあてるため、自主的な善意により引続き賛助会員による賛助会費の運動を続けております。会費は、お一人年3,000円(1口)です。

個人でもクラブ単位でも結構です。何卒賛助会への入会をよろしくお願いたします。

お申し込み、振込先

賛助会費振込先  
静岡銀行 下土狩支店 普通 0367598  
財団法人 米山梅吉記念館 理事長 内藤成雄

